

司馬遼太郎



街道をゆく十

街道をゆく十

司馬遼太郎

毎日新聞社

昭和五十三年十一月十五日 第一刷発行
昭和六十一年十二月三十日 第三刷発行
街道をゆく 十

定価 一五〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 八尋舜右

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五丁目二
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九七八年

ISBN 4-02-254605-0
Printed in Japan

街道をゆく
十

本書には「週刊朝日」昭和五十一年十月二十二日号・連載第二百七十三回から、五十二年四月一日号・第二百九十六回分までを収録。

目次

羽州街道

山 寺

紅 花

芋 煮 汁

うこぎ垣

景勝のことなど

7

21

35

49

63

米沢の“お手柄”

最上川

狐越から上ノ山へ

山形の街路

花の変化

佐渡 国なかみち・小木街道

王朝人と佐渡

大佐渡・小佐渡

あつくしの神

真野の海へ

183

171

157

143

131

117

103

91

77

倉谷の大わらじ	195
小木の海	209
鼠 浄 土	223
辻藤左衛門の話	237
孫悟空と佐渡	251
室町の夢	265
黄金の歴史	279
藤十郎の運命	293
二人の佐渡奉行	307
無宿人の道	319

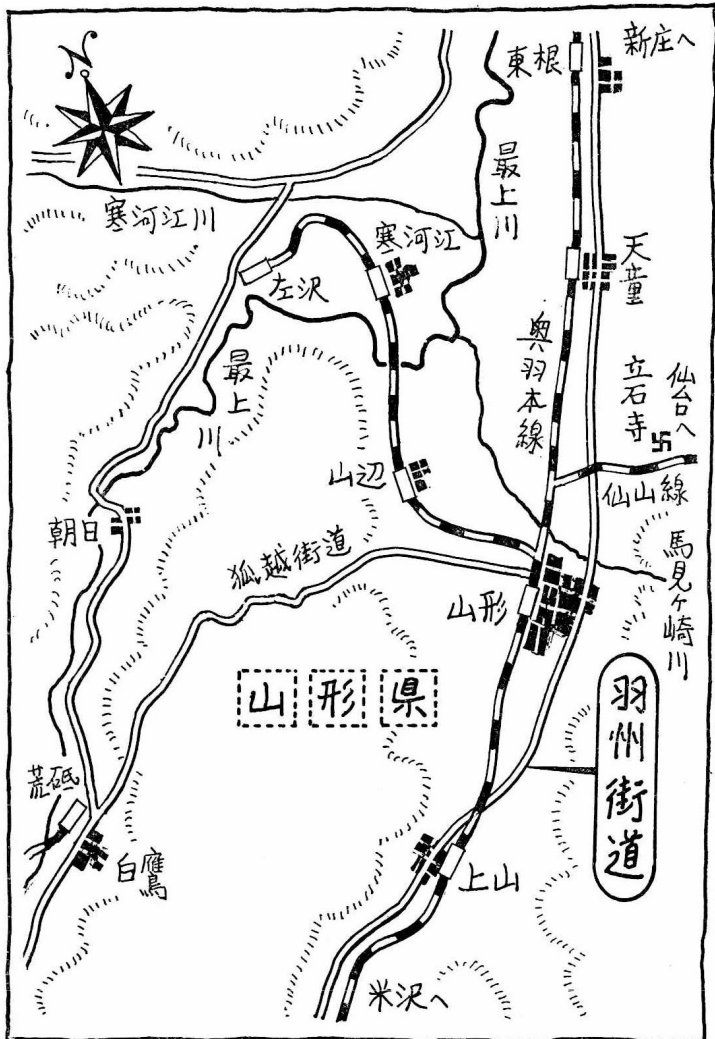
題字 || 棟方志功
え || 須田剋太
装幀 || 原 弘
地図 || 大川一夫

山

寺

羽州街道一





私は東京を知らないために東北についても昏い。中学生のころ、箱根以東は一つの世界で、その東北の勢力が西南へのびることによって東京という町が形成されていると錯覚していた。この話を東京うまれの友人にすると、かならず笑われる。しかし昭和一ケタから二ケタにかけて少年期を送った者としては、内閣といえど東京にあり、その内閣の首班が構成員にはめだつほどに多数の東北各県の出身者がいた。上方には東北出身者がほとんどいない。東北人の人名に接するのは新聞のその種のニュースのとき以外、まず無いのである。

大人になってからの東北観はそれほど単純ではないが、しかし似たようなものかもしれない。

二十代の東北観は、東北の風土からは詩人がむらがり出てくるという印象が基礎になっていた。幾人かの東北出身者と知りあうにつれて、かれらが自分の境涯や物事への感想を語るときに特有の抑揚を帯びることを知った。その抑揚には微量ながらも詩的気分が含有されているようにおもわれ、こういう土壌から傑出した詩人群を生み出すのかと思った。

山形への旅は、はじめてである。

寺
山
最上川を一度見た記憶があるのだが、その記憶が正確だとすれば、山形県の県下を一度はかすめ過ぎたことになる。が、いま地図をひろげていろんな地名をたどりつつその曾遊について

覚えがあるかないか、記憶の空白部を刺激してみたのだが、しかしどの地名も知識として知っているだけで、経験のぬけ殻として残るはずの現場での気分がどうしても再現されて来ない。そのくせ、晴れた日の下の山峽をくろぐろとして流れる最上川の色も速さも記憶している。私はテレビを見る習慣がないから、テレビの映像が経験の中にまぎれこんでくることはまず無い。ひょっとすると、その情景は夢であったかもしれない、もしそうなら、芭蕉の句によって結像された擬似的な経験にちがいない、そうであるとすれば、

五月雨をあつめて早し最上川

という『おくのほそみち』の中の句は、まことに玄妙な力をもっているといわざるを得ない。

ともかくも、最上川をうつつの中で一見しなかった。須田画伯に相談すると、異存はない、私も山形ははじめてです、と言い、

「やはり尿前越しんまえを越えてゆくのですか」

と、いった。尿前越というふしぎな地名は『おくのほそみち』に出てくる。画伯の詩文に関する記憶のよきは脳細胞に刻字を打ちこんだようで、ときどきおどろかさされる。

芭蕉は陸奥の平泉のあたりから出羽（山形県もその一部）へ出た。経路はいまの地名でいえば宮城県の西北角を走っている国鉄陸羽東線の沿線をたどり、宮城県鳴子町から山形県堺田へ越えたのであろう。このあたりはいまは尿前越とはよばれず、堺田越とよばれている。

南部道遙にみやりて、岩手の里に泊る。小黒崎（おぐろさき）、みづの小嶋（をじま）を過（すび）て、なるご（註・鳴子）の湯より尿前の関にかかりて、出羽の国に越（こえ）んとす。

画伯のふしぎな頭脳は、この文章を、三、四カ所誤まっただけでほぼ記憶していた。が、私どもは芭蕉の道をたどるほど十分な時間を持たないために、飛行機で伊丹を出、いったん羽田に降り、さらに乗り継ぎ、午後二時すぎ、山形盆地の上に達した。

空から見る盆地は、稲田（いなだ）が熟（う）れているために黄色が主調になっている。その中に、小規模な樹林がちょうど混紡されたように無数に点在していた。

「リング畑ですね」

画伯は、いった。稲田とリング畑できあがった色面のなかに、赤や青の屋根の集落が入りまじっている。私は日本の景色に赤や青の屋根瓦は浮きあがって適（あ）わないと思っていたが、山形盆地は標高が高いということもあるのか、例外であるようだった。

山 寺

空港は、山形市の北方二十キロの田園の中にある。空腹だったので、空港ビルでラーメンを注文した。とりあえず、行くあてはない。

地図を広げてみると、空港の所在地は、東根市ひがとねということになっている。それを南北に羽州街道という古い官道が串刺しするようにつらぬいていた。東根から地図の上で南下してみると、天童、山形、上ノ山かみ、米沢というように古格な城下町が珠たまをつらねたようにこの街道ぞいに押しならんでいて、壮観といえば壮観だった。この旅は、その縦一列の珠たまをたどることになる。

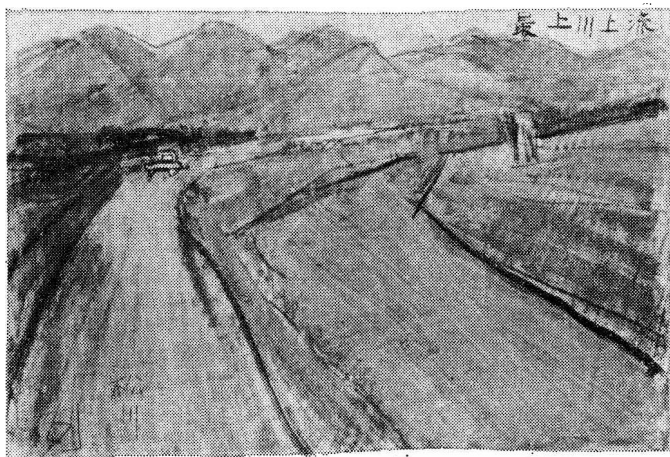
「きょうの宿は、米沢にとつてあります」

と、編集部のHさんがいった。連珠の南端まで一挙に行ってしまうことになるのだが、途中立石寺りゅうしやくじに立ち寄れないかと思って地図を見ると、幸い、天童の南から東への枝道をとればそこに「山寺」という地名がある。その里の上に立石寺という文字が印刷されていた。

「立石寺ならすぐです」

と、土地の運転手さんがいつてくれた。土地ではリッシャク寺という。ふつうは、リュウシヤク寺という。

奥羽の地に正規の仏教が伝わるのは、よほど遅かったらしい。奥羽ぜんたいに面として仏教



がひろまってゆくのは元禄時代ぐらいからだとい
う極端な説さえある。

奈良朝から平安朝初期までは、東北六県は中央
政権から独立したかたちであったといっている。
中央政権の文明思想は弥生式稲作農耕であり、稲
作によって定着せずに縄文以来の採取生活を固執
して山野を駆けまわっている者は夷(蕃人)である
とした。華夷の差を立てるといっているのは、中国の政
治思想の基礎といっている。本場の中国でも華と
いうのは大きくいえば定住農耕者のことであり、
夷は遊牧その他の非農耕者だったといっている。

「山夷」

などというおそろしげな用語が、日本の律令初
期の官吏によって用いられたが、要するに山の幸
によって生きる縄文的な生活様式の連中をいった
のであろう。中央政権は奥州征伐というものを繰

りかえしたが、要するに弥生式農耕をすすめてまわる運動だったといつてよく、その意味からいえば初期律令国家というのは水田農耕を推進して租税の増収をはかる公社といったような性格があった。その公社に順った者は、「山夷」に対する言葉として「田夷」とよばれた。あるいは別に俘囚とよばれた。非服従者は、夷俘である。じつに人をばかにした用語で、単に水稲耕作者であるかないかというだけで民族が異なるように表現するのは、ことごとしく華夷の差を立てる中国思想の悪弊といつてよく、これが原型になって後世にまで悪影響をおよぼしている。

奥羽がそういう状態であったために、正規の仏教が入りにくかった。正規の仏教というのは、具体的には官寺官僧を指す。日本の仏教は原型としては中国の隋唐仏教であり、隋唐仏教は表むきはひたすらに「鎮護国家」を目標とする。具体的には国立の寺を立て、国家公務員としての僧を置くというもので、奈良六宗もそうであり、天台・真言という平安仏教も徹底してそうであった。

律令初期、奥羽の状態が不安定（中央政權から見ても）だったときに、中央政權がわざわざここに官寺を建てるなどという条件は、例外がわずかにあったにせよ、不可能に近かった。

ところが、遠く平安初期にたてられたという立石寺は官寺（定額寺）である。その意味においても、めずらしいといわねばならない。